

日本における外国人妻のアイデンティティ — 中国人妻の事例を通して —

伊藤 孝 恵

要 旨

日本人男性と国際結婚した外国人妻は日本社会において自分自身の存在をどのように認識しているのか、中国出身の女性2名に20 答法で問い、その中で最も現在の自分に当てはまる項目について PAC 分析で外国人妻のアイデンティティの深層構造を明らかにした。その結果、一人は「わたしは来日9年目の中国人である」と答え、日本社会で周囲と違和感なく過ごせる自分を評価している一方で、自分の内面の芯の部分に「中国人」としてのアイデンティティが潜んでいることを指摘した。もう一人は「わたしは二人の子どもをもつ母親である」と答え、ナショナルアイデンティティや文化的アイデンティティよりも、母親としての責任感が強く現れた結果が出た。今後は、彼女たちの他のアイデンティティも分析するとともに、今後のライフステージの変化によって変わっていく過程も追跡していきたい。

キーワード：外国人妻、アイデンティティ、WAI、PAC 分析

1. はじめに

「自分は何者であるか」と自己定義を行い、「自分の生き方」を方向づけて自己同一性を確立していくことは青年期の発達段階において重要な課題であるといわれている（山田1997）。しかし、自分自身と向き合い、自分が何者であるかを自問することは、青年期に限った態度ではない。環境が変化し、自分のハビトゥス¹が周りの環境との差異に晒された場合、母文化へ回帰したり新しい環境に合ったハビトゥスを作り変えていく過程で自己を見つめ直す作業が行われる。箕浦（2002:13）は、人はある特定の文化的文脈で生活するうちに、そこで展開される文化実践に畳み込まれている文化的意味を選択的に摂取して、自分の内面に意味世界を構築していくとし、この内面環境を意味空間と名づけた。そして、別の文化圏に移動し、その新しい環境に馴染もうとすればするほど、新しい文化圏の文化的意味を自分の意味世界に取り込まねばならず、結果として文化間を移動した人の意味空間は母文化とホスト文化の混じり合ったハイブリッドなものになるという。ここで言うところの「文化」とは必ずしも国境を伴う文化に特定されないが、国を跨って文化間移動した人にとっては、社会システムや文化的慣習等が変わることにより、自分の意味空間が大きく揺らぎ、それに伴い、自分と他者、社会全体との関係性に基づく自分自身の存在意義といったものを捉え直す作業が必然的に起こると考えられる。

¹ 箕浦（2002）によると、ハビトゥスとは、「態度、概観、服装、習慣、気分、性質」など多様な意味をもつラテン語の名詞で、人間の行動にはその人が生きてきた社会的文化的文脈が埋め込まれているという。

一般的に異文化適応におけるアイデンティティについて論じる際、民族的アイデンティティや文化的アイデンティティ、あるいはナショナルアイデンティティが強調される感があるが、原（1995）はアイデンティティの全体像を捉えた上で異文化接触との関係を考察すべきであると指摘する。原は、アイデンティティという言葉には少なくとも（1）自己（自我）同一性であり、内面的な同一性と持続性を統合的に維持している私を確信するもの、（2）社会的な帰属意識や所属の明確性や安定性を指すもの、（3）自分が存在する意味、生きていることの価値などを認められるもの、（4）生物学的な特徴の顕現性や一致度と受容性のようなものに分けられるという。そして、（2）の社会的アイデンティティそれ自体が単独で大きな問題になることはないものであり、必ず自己のアイデンティティに心理的な現実として重要な影響を及ぼす時に初めて現実的な課題として浮かび上がってくるとしている。つまり、「自分は何人（どこの国の出身）であるか」と自分自身に問い直したり、社会における自分の存在意義を見失いかけたり、ホスト社会における価値観や習慣の違いに戸惑ったりすることは、確かに、社会の中で他者との相互関係によって起こることではあるのだが、社会性を全人格的な要素として国民的、文化的な帰属意識といった社会的アイデンティティの問題を単独に捉えるのではなく、自己（自我）アイデンティティの形成上において意味づけしていく必要があるといえるだろう。

近年の国際的な人的流動化の中で、国を跨いで文化間移動し、ホスト社会の男性と新たな家庭を築いている外国出身の女性（以下、外国人妻）は、短期滞在者のような一時的な異文化接触によるアイデンティティの揺らぎではなく、就職、結婚、出産など各ライフステージで環境が変化するのに伴い、「自分は何者か」と自分自身に問いかけ、自分自身に対する認識を修正する過程を繰り返していくと想像される。そこで、本稿では、日本に定住する外国人妻の個々の事例を分析することにより、各人の現時点のライフステージにおいて外国人妻は日本社会の中で自分自身をどのように捉えているかを考察する。

2. 研究背景

日本における国際結婚は、約8割が「日本人夫、外国人妻」の組み合わせであり、しかも外国人妻の約9割が、中国、フィリピン、韓国・朝鮮、タイといったアジア諸国出身者であるという特徴がある（厚生労働省 2006）。そこで本節では、アジア出身の外国人妻が日本社会において晒されている一般的な諸問題について整理する。なかには、外国人妻特有の問題というより定住外国人全般に該当する問題も包含されるが、外国人妻もまた定住外国人であることから、ここではこれらをまとめて外国人妻の抱える問題として述べたい。

まず挙げられるのがコミュニケーションに関する問題である。円滑な対人関係を築く上で欠かせないのがコミュニケーションである。コミュニケーションには言語は勿論のこと、適切な対人的行動をとる社会的スキルも必要である。大坊（2005）は、その社会に適応的な生き方が可能となる社会的スキルについて、他者の態度や心情、メッセージをどう認知するのかといった対人認知と、他者に対して自分がどう働きかけていくかといった対処行動、そしてその際に自分の思いやメッセージをどれだけ正確に相手に伝えることができるかといった記号化を総合的に扱ったものであると述べている。

日本で生活する外国人妻にとって、円滑な対人関係が求められるのは、家族であり、地域社会であり、夫や子どもの関係者などである。仕事をしていれば、職場の人々も含まれよう。非欧米系の外国人妻にとって、日本人とのコミュニケーションで使用される言語は主に日本語であり、日本語で文脈に適したコミュニケーションが図れるか否かが対人関係に影響を及ぼすことになる。しかし、ホスト社会の日本人には自明なことと慣習化されているハビトゥスは、当人には客観視されにくいいためそれを共有していない人からは指摘することが難しく、「当たり前」「そうすべき」という社会的な価値観に支えられ、異議を唱えることが阻まれやすいと言われている(猿橋 2009)。仕事や子どもの学校からのお便り、地域活動での話し合いなどの場面で、日本語でのコミュニケーションで当然だと思われる情報の取捨選択や解釈、判断、伝達の方法等が彼女たちに自動的に押し付けられ、それに対し疑問や異議を挟むことも難しく、釈然としないまま、あるいは誤解や理解不足を招いたままで受け入れざるを得ない状況に置かれることがある。その結果、本人にストレスが感じられるだけでなく、職場の上司や子どもの保護者などから、「そんなことも知らないのか」「日本人ではないから理解できないのか」といった言葉を投げつけられ、傷つくこともある。日本語での意思疎通が難しく、地域の日本語教室に通いたくても交通手段の問題や学習時間の確保の難しさ、家族の理解不足などの理由により日本語が学べないケースも指摘されているが(石川 2003)、実際には、日常会話に支障ないレベルの日本語力を身につけている外国人妻は少なくなく、周囲も日本人と同様にコミュニケーションを図ろうとするだけに、ふとしたコミュニケーション上の違いが、対人関係に誤解を生じさせることとなる。

また、言語の価値には、実用性とアイデンティティの2側面があるが、家庭内においても実用性や経済性の方が優先され、アジア出身の外国人妻の大半は日本語の使用を余儀なくされているといわれている(河原 2009)。外国人妻にとって、自分の母語で我が子に話しかけることにより、言語そのものだけでなく、自分がこれまで母文化で培ってきた文化的要素や、心のひだに浸透するような情緒的な要素を子どもに伝えることができる心理的な意味合いもあるはずであるが(伊藤 2006)、「〇〇語(母親の母語)を話していると苛められる」「恥づかしい」などと言って話したがらない子どもの言動や、日本社会で外国出身の母親をもっていることを引け目に感じないでほしいという母親としての思いから、完全に子どもを日本人化させようと努める外国人妻の姿も報告されている(賽 2009)。

子どもにどの言語を継承させるか、習得させたいかは、外国人妻にとり母子間の文化的・心情的交流に関わることであり、一種の教育的戦略でもある。子どもの言語習得には、自分自身では主体的に選択できなかった生き方を、子どもを通じていま一度選択し直したいという外国人妻自身の思いが込められているという示唆もある(賽 2009)。そこには、日本の性的役割分業や女性の就労に関する現状と考え方(厚生労働省 2010, 鈴木 2006)に戸惑い、自分の思うような結婚生活や働き方ができないもどかしさが反映されていると思われる。しかも自分に稼ぎがないと、お金の使い方に不自由さが増し、母国へ送金したくても夫や姑の許可を得なければならず、「自分一人では何もできない」という自信の喪失感に苛まれるケースもある(定松 2002)。そのため子どもには、将来の環境に適應し、言葉を自在に操って自分自身で生きてい

ける力を身につけてほしいと願うのである。

しかし、日本で学童期を経験してこなかった外国人妻にとって、日本における子育ては全く未知の世界であり、入学や各行事に向けた準備や、子どもの習い事や教育などについて、日本のやり方に倣おうとするとその対応が周りの保護者と比べて遅れがちになることもある。加えて、母国で家族や親族、友人や地域の人々に囲まれ、助け合ってきた外国人妻にとっては、日本の地域社会は近所との交流が少なく、助け合ったり情報や感情を共有したりすることが少ないため、一層孤独感に陥る人も少なくない（クルプラントン 2008）。

このように、日本に定住する外国人妻にとって、日本の地域社会は自己実現や自己表現するのに閉塞とした社会であると思われる。そのため、彼女たちは母文化と異なる日本文化に接触したり、出産などのライフイベントを迎えるごとに、自分たちの存在意義を問い直したり、自分が何を支えにして何を喜びとし、何に向かって行こうとしているのか自分自身に対する認識を再構築する必要性が生まれてくると考えられる。そこで本稿では、日本人男性と結婚した中国人女性の事例を2例取り上げ、彼女たちが各々のライフステージにおいて自分は何者であると捉えているのか、そしてその構造を彼女たち自身に解釈してもらうことで、彼女たちが自分自身をどのように認識しているのか明らかにする。

3. 調査の目的と方法

3.1 調査時期と対象者

調査を実施した時期は、2010年7月25日と8月8日である。本調査で対象としたのは、日本人男性の配偶者である中国籍の女性2名である。いずれも中国で出生し青年期²の前半を過ごした後、留学のため来日し、日本で現在の夫と知り合い、結婚している。日本の家族も含め、周囲の人々との会話はほとんど日本語で行われている。

3.2 調査方法

本調査では、2名の被検者に対しそれぞれ(1)「私は誰だろう？」テスト(The 'Who am I?' test, 以下WAIと記す)とよばれる20答法(Kuhn & McPartland 1967)、(2)PAC分析(内藤2002)、(3)フォローアップ・インタビュー、の3つの方法を用いて調査を行った。

WAIは、「私は誰だろう」と自分自身に繰り返し問い掛け、空白を埋めていくというもので、通常はその答えが思いつかなくなるまで挙げていってもらう。今回は、挙げられた回答の中から、現在の自分の心境に最も当てはまるものを一つ選んでもらい、それについて、以下の手順でPAC分析を行った。

PAC分析は、内藤(2002)に倣い、まず、連想刺激としてWAIを基にした以下の質問を文章で提示するとともに口頭でも読み上げた。その後、土田が開発した「PAC分析支援ツール」³を使用し、連想された事柄の入力、重要順位の測定、類似度距離行列の作成を行った。最後に、

² 青年期とは、『広辞苑』によると男女の14・15歳から24・25歳までの時期とある。

³ 金沢工業大学の土田義郎氏が開発したコンピューター上でPAC分析が行える分析ツールを、今回土田氏の了承を得て使用した。

クラスター分析によるデンドログラムの作成と、被験者による解釈を聞き出した。

「あなたが「〇〇（WAIで挙げられた回答）と感じたり思ったりするのは、どのような時や場面、状況でしょう。そのような時、どんな気持ちになったり、態度・行動をとったりしがちですか。思いつくままに自由に書いてください。」

4. 調査結果

本節では、被験者の発言を適宜割愛しながら引用し、文中において補足説明や筆者の質問は（ ）の中に記した。

4.1 被験者Aの事例

調査時、被験者Aは27歳で、日本のIT関連企業に勤務し、6歳年上の夫と結婚して2年経つ。WAIでは、「わたしは来日9年目の中国人」「わたしは将来日本に帰化するかどうか悩んでいます」「わたしは日本でいい奥さん、いいお母さんになれるのか不安です」などが挙げられたが、これらのうち現在の心境に最も当てはまるのは「わたしは来日9年目の中国人」であると答えた。そこで、この回答を基に連想刺激として質問文を作成し、その回答についてクラスター分析を行った結果、図1のデンドログラムとなった。

連想刺激に対して、計14のイメージが抽出され、プラスのイメージの項目が4つ、マイナスのイメージの項目が6つ、どちらでもない項目が4つであった。全体としてクラスターを2つに分けるのか3つとするのか、被験者Aに解釈を求めたところ、2つであると答えたため、クラスター数を2つに決定した。クラスター1は、「びっくりして嬉しい」から「違和感を感じる」までの8項目で、プラスイメージのものが3つ、マイナスイメージのものが1つ、どちらでもないものが4つで構成されている。これに対し、クラスター2は、「日本人よりも日本人扱いと言われたとき」から「恥ずかしく感じる」までの6項目で構成され、1項目を除いて他はマイナスイメージであった。

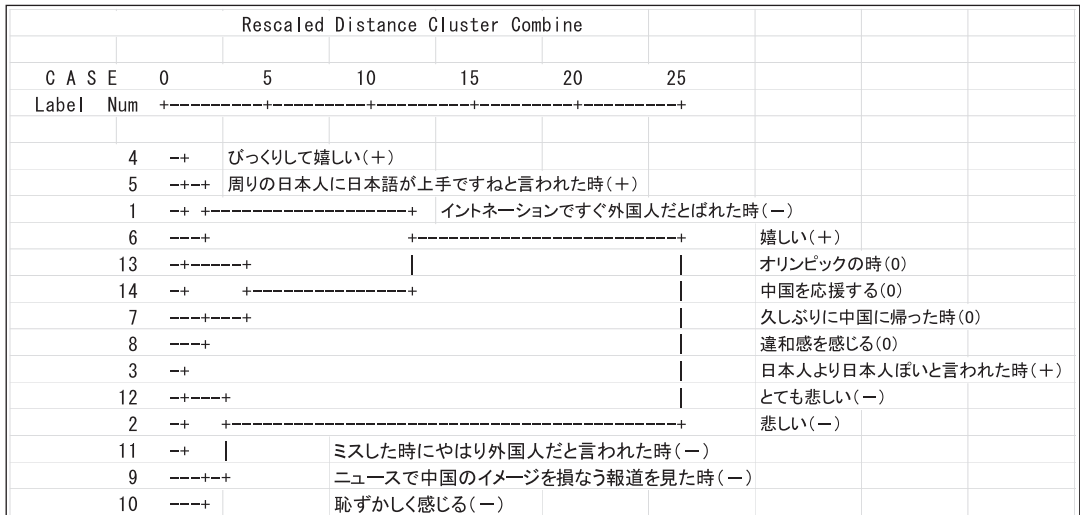


図1. 被験者Aのデンドログラム

a) 左の数値は重要順位 b) 各項目の後ろの（ ）内の符号は各項目のイメージ

4. 1. 1 被験者 A によるクラスター解釈

クラスター 1 は、「びっくりして嬉しい」から「違和感を感じる」までの 8 項目：

(クラスター 1 は) 自分の中で嬉しく感じることに、その感情をまとめたグループだと思います。そうですね、全体的にはプラスイメージのグループだと思います。(ほかには) 何か相手に言われても、嫌な気持ちしないグループですね。(嫌な気持ちがしないグループ) ええ。言われたいグループ。周りの日本人に言われたい。

クラスター 2 は、「日本人よりも日本人っぽいと言われたとき」から「恥ずかしく感じる」までの 6 項目：

(クラスター 2 は) これは言われたくない。言われるときに自分の中で隠したい。恥ずかしく感じる。

クラスター 1 とクラスター 2 の比較：

1 のグループ (クラスター 1) で言うと、自分の中で日本人っぽい、来日 9 年目でちょっと日本人の、日本人のとこ偏っているグループだと思うんですけど、グループ 2 (クラスター 2) だと、まだ自分の中のアイデンティティが、まだ中国人の部分が残っているのが大きい。こっち (クラスター 1) はだんだん日本人に近くなったイメージ。日本人として、そうですね、少しずつ日本の生活に入ってきたような感じですね。(日本の生活に入ってきた) はい。だんだん慣れてきた。やっぱり 9 年目で、言葉も生活習慣もだんだん慣れてきたのは、この全部まとめたグループ 1 (クラスター 1) ですね。はい。

(じゃあ、2 (クラスター 2) の方は) (クラスター) 2 のほうはやっぱり、無意識の中に中国人の部分が出てきたところですね。例えば、やっぱりニュースとかで中国にとってはマイナスな報道とか出てくると、隠したい。言われたくない。反論したいとか、のとき出てくるんですね。上の 1 のグループ (クラスター 1) は、自分で人に出してもいい、見せたい。見せたい一面と、グループ 2 (クラスター 2) だと逆に隠したい。何か、影みたいな。見せたくない。はい。

全体について：

そうですね、やっぱり、生活習慣も食習慣も、外見的に生活の全体的な感じは、もう日本式になっているんですけども、やっぱり心の芯の部分はまだ中国人のところが強が残ってますね。日本式というオブラートに包まれた中国人みたいな感じですね。どっちでもなくというか。(どっちでもなく) そうですね、中国に対する愛国心という部分はいつまで経っても残ったままで、もう少し言葉とかのところ、生活習慣の部分にももう少し日本に近寄りたいたいですね。いつまで経っても、私はやっぱり芯のところ日本人ではなくて中国人だから、はい。

補足質問：

(「悲しい」とは?) 悲しいと感じるときは、やっぱり自分自身の中に、もう来日 9 年も経ってたら、言葉も習慣もある程度日本のことに慣れてきたので、それなのに、すぐ外国人と分かっているところで、ちょっと悔しくて、何か悲しいですね。まだ、何て言うかな、まだ受け入れてもらってないかと思って悲しいです。はい。どうしても、日本人という集団から区別されている。「やっぱり外国人ですね」と言われているところが悲しいですね。

(「とても悲しい」とは?) そうですね、とても悲しいというのは、ミスしたときに、なぜかと言うと、周りの人から見るとできて当たり前なことで、日本人にとってはすごい常識的なことでも、できてなくて、「あ、やっぱり外国人だから駄目ですね」と言われたときにとても悲しいですね。例えば会社だと、当たり前に残業したりとか。周りの上司がまだ帰ってないときに 1 人帰ってるのはすごい失礼とか、そういうところで。何て言うか、当たり前と感じるんですけども、でも自分の仕事が終わって、6 時以降の時間、自分の習い事とかに使いたいから、早く帰りたいので、そういうところでちょっと悲しく感じるんですね。

(「日本人より日本人っぽいと言われたとき」とは?) 例えば食の習慣とか、好きな食べ物とかも。あと、日本食に対する好き嫌いは、普通の同世代の日本人の方よりも少ないというところで。趣味とか、お寿司好きだし、

そういうところも、「日本人よりも日本人っぽいですね」とよく言われます。はい。そう言われると、やっぱり9年も日本で生活する甲斐があったんですね。とても嬉しく感じます。はい。

（「久しぶりに中国に帰ったとき」とは？）そうですね、もう20年間以上中国で生活していたにもかかわらず、久しぶりに帰ったときに、なぜか中国の生活に不便というところを感じて、慣れなくて。あとずっと日本で置文化だし、地べたの生活で、中国でいきなり机とか座ってる、食事するのもすごい違和感が感じました。

（「オリンピックの時」とは？）オリンピックのときは、心の中ですごい、何て言うかな、心の中で戦ってます。なぜかと言うと、今一緒に生活しているのは日本人の方で、同じ、オリンピックのときに、中国と日本が対戦すると、どうしても喧嘩になりそうですね。ええ。（イメージは0ですね）ええ。これぐらいあっても、日本人許してもらえかなと思うんですね。

4.1.2 被験者Aに対する総合的解釈

全体的にマイナスイメージの項目がやや多く、プラスマイナスどちらのイメージももたない項目も4つあることから、Aの「来日9年目の中国人」というアイデンティティには心の拮抗が見受けられる。

まず、クラスター1は、A自身が述べているように、「周りの日本人に言われたい」「言われても嫌な気持ちがない」項目を中心としてまとまっているように思われる。「周りの日本人に日本語が上手ですねと言われた時」と「イントネーションですぐ外国人だとばれた時」は隣接しており、表裏一体の関係と受け取れ、前者の場合には嬉しさを感じている。また、オリンピックの競技を日本人の夫と見る際には、無意識に中国人選手への応援に熱がこもってしまうが、これくらいは日本人に許してもらえだろうと思っている。久しぶりに中国に帰った時には懐かしさの反面、日本の生活習慣が身に付いてしまっているAにとっては、中国の生活スタイルに違和感もある。Aは、このような自分自身を、9年に及ぶ日本での生活の中で少しずつ日本の生活習慣に慣れてきて日本人らしくなってきたためであると認識している。そのため、このような「日本人に近くなってきた」自分の言葉遣いや生活態度は、日本社会においては周りの日本人との間に違和感なく受け入れてもらえることから、見せられる部分、見せたい部分である。したがって、このクラスターは〈見た目上日本人らしくなった自分〉であると解釈できよう。

一方、クラスター2は、本人曰く、「言われたくない」「隠したい」「影みたくない」部分である。Aがこのような思いになるのは、中国のイメージを損なうような報道を目にした時や、仕事でミスした際に「外国人だから」という一言を耳にした時である。

中国に対して否定的なイメージを伴うニュースについては、同じ中国人として恥ずかしく感じるだけでなく、日本人との会話で中国人を非難する発言が聞かれると内心傷つくこともある。自分も反論したいと思うことがあっても実際に口にするのは躊躇されるため、できる限りこのような中国に関する否定的な報道には日本の人々に接してほしくないと思っている。

また、仕事において、日本人にとっては常識的なことでミスしたり、できなかつたりすると「やっぱり外国人だから」という一言が付きまとうことを悲しく感じている。来日して9年も経ち自分では日本語や日本の習慣に慣れているつもりでも、ふとしたことで日本人との違いを指摘され、「外国人」というレッテルを貼られると、「日本人という集団から区別されている」「受け入れてもらえていない」と悲しくなるという。

ところで、このクラスター2を構成する「日本人より日本人ぽいと言われた時」という項目についてであるが、クラスター2の中ではやや他の項目と趣を異にする感があり、どちらかというクラスター1に属するように思われたのだが、これについてAからは何も発言はなかった。補足質問でも、趣味や食べ物の好みが日本人より日本人らしいと言われ、「やっぱり9年も日本で生活した甲斐があったんですね」と嬉しさを伴ったプラスイメージで捉えていた。ただ、デンドログラムを見ると、この項目は「とても悲しい」と結合しており、筆者はAの中で、趣味や好みなどの表面上の日本への「適応」と、本人が言うところの「心の芯の部分はまだ中国人」としてのアイデンティティとが、せめぎ合っている項目ではないかと考える。Aは「とても悲しい」という項目について具体的に日本の残業を例に挙げ、自分は早く仕事を終えて帰宅したいのだが、上司や同僚がまだ仕事をしている中、自分一人だけ帰宅するのは日本のマナーに適っていないと言われた時だと述べている。今は自分も周りの人たちの帰宅時間に合わせて帰るようにしているが、本心はこの日本の習慣に納得していない。したがって、Aは表面上は日本人らしく振舞い、生活習慣や食生活などで日本風になっているものの、ニュースや周囲の発言など外的な刺激によって、自分が中国人であることを意識させられたり、日本人の価値観や習慣に違和感を覚えたりした際には、心の中まで日本人らしくあることに抵抗感が生まれるのではないと思われる。A自身、生活習慣の部分ではもう少し日本に近づきたいけれど、中国に対する愛国心は何年経っても残ったままだと述べている。そのため、クラスター2は、〈変わらぬ中国人としての自分〉であるといえよう。

今回のPAC分析を通して、全体的にAは「来日9年目の中国人」としての自分を、「日本式というオブラートに包まれた中国人みたいな感じ」と表現している。Aは、日本社会においてできるだけ周囲と違和感がないよう、言動や習慣が少しでも日本人らしくなるよう気を配り、中国人としての自分をあまり表に出さないようにしている。そのような努力が周囲に認められたりした際には、9年間日本で頑張ってきた甲斐があったと嬉しく思う。その一方、仕事でミスした時やちょっとした言葉遣いの違いで「外国人」扱いされることに、日本社会の閉塞感を覚える。また、日本人の中国に対する否定的な報道や言動は、自分が中国人であることを一層表出しづらくさせ、中国人としての思いを一人心の奥底にしまい込んでいる様子が見受けられる。このようにAは、「来日9年目の中国人」として、表面的に日本人化しつつある中国人の自分に対し心の葛藤を抱えているようである。

4-2 被験者Bの事例

被験者Bは、調査当時40歳で、結婚10年目。8歳の女の子と4歳の男の子の二児の母親である。

WAIでは、「わたしは二人の子どもをもつ母親です」「わたしは主人の会社の話をよく聞かされています」「わたしは最近漢字をよく忘れています」などが挙げられた。これらのうち、親が守っていかなければならない子どもが今の自分にとって最も大切であることから、現在の自分に最も当てはまるのは「わたしは二人の子どもをもつ母親です」とであると答えた。そこで、この回答を基に連想刺激として質問文を作成し、その回答についてクラスター分析を行った結

果、図2のデンドログラムとなった。

連想刺激に対して得られた回答は全部で11あったが、重要度の上位4項目がマイナスイメージ、残りはすべてプラスイメージであった。クラスターの分け方について、デンドログラムを見せながらB本人に解釈を求めたところ、重要度9の「授業参観」とそれ以外の項目に分けられると答えたため、クラスターを「やった！」から「病気」までの10項目と、「授業参観」の2つに決定した。

		Rescaled Distance Cluster Combine						
CASE	0	5	10	15	20	25		
Label	Num	-----+						
	9	--+	授業参観(+)					
	11	--+						やった!(+)
	8	--+						勉強(+)
	2	--++						仲間はずれ(-)
	4	--++						いじめや虐待のニュース(-)
	6	---+	+-----+					助け合う(+)
	3	---++	+-----+					事故に遭う時(-)
	7	---+						学校の帰り(+)
	5	-----+	+-----+					悩み(+)
	10	-----+			成長(+)			
	1	-----+			病気(-)			

図2. 被験者Bのデンドログラム

a) 左の数値は重要順位 b) 各項の後ろの()内の符号は各項のイメージ

4.2.1 被験者Bによるクラスター解釈

クラスター1は、「やった！」から「病気」までの10項目：

(クラスター1は) これは、何て言うの、子どもの、外で、自分が目届かない所であったものは、私が守って、どうやって子どもを守るって。子どもたち自分で頑張るんじゃないって、私の力も必要って、かな。何かそういう。子どもだけで頑張るんじゃないって、私も一緒に守ってあげるとか、一緒に頑張るって。

(ほかには?) うん。助け必要っていうか、何か、子どものことは何でもしゃべってほしい。そしたら一緒に助けたりとか、一緒に悩んだりとか、そう思った。

クラスター2は、「授業参観」の1項目：

(クラスター2は) 授業参観ね。授業参観、何だろう。何か、子どもの報告じゃなくて、私は見に行ってるから。何だろう、何でずれてるんだろう。何だろうね。何だろう、授業参観だけは、本当は自分で、何て言うの、その場で自分で見てる。他のはもう、いろんな、見れない。(見れない?) うん。見れないっていうか、一緒に、授業参観だけは何か、一緒に参加したり、悩んだりとか、そうじゃなくて、何て言うか、私の手で解決するじゃなくて。Cちゃん(長女の名前)の力。自分の力とか、そうだね、自分で、んー。普段学校で例えばちゃんと先生の授業を聞いているかどうか。で、普段、手ちゃんと上げたりとか、こういうのはそのときしか見れないから。確認できるってこと、うん。いいチャンス。

クラスター1とクラスター2の比較：

違いはね、そうだね、これは(クラスター1は) こういう何かのあるときは、何かって、全部、何か大人の助けが必要とか、アドバイスが必要とか。とにかく、Cちゃんは1人の、Cちゃんって、子どもたちの1人の問題じゃないっていうか。私が一緒に、例えば仲間外れとか、自分が1人で悩んだりとか、子どもは、お友

達とどうやってうまく遊べるとか、たぶん本人が悩んでても解決できないときあるから、だから、私がどういう助言するって、それによっていろんな変わるんじゃないかなと。

(授業参観(クラスター2)の方は?) うん。見られるけど、これは何て言うの、一緒にやったら変わるとか、そうじゃない。

全体について:

一番強く思ったのは、やっぱり子どもたちほっとかしてじゃなくて、サポートして、いろんなこういう、一番不安なのは、成長とともに自分としゃべってくれなかったりとか、いろんなことを教えてくれなかったり。何か外で辛いことあったら、自分でしゃべらなかつたら、隠したら、それがちょっと一番の悩み。

補足質問:

(「病気」とは?) 病気って、そうですね、子どもって病気とかなるとき、そのとき私しかいないから、守っていく人、例えば病院に連れて行ったりとか。あと、急に熱とか出たり、具合悪くなったとき、やっぱり普段はいろんな気を遣って、早く病気、熱出たりとか、早く気が付くとか、それが自分が母親だから。

(「仲間はずれ」とは?) 仲間外れ、たぶん誰々のグループと一緒に入りたくて、でも「だーめよ」とか言われて、嫌な思いをさせたことあるみたい。幼稚園のときからそういう…、入りたくて、そう、入れないとかね。そういう、何かあるみたい。で、そういう話を聞いて、「入れてくれないから、誰々大嫌い」とか言うんだけど、じゃあ、自分、母親だから、「その人が意地悪じゃなくて、その人たちはもういつも遊んでいるから、慣れてるから、Cちゃんのこと何も知らないから、急に『入れて』って言っても、それが入れてくれないのは、そういうこともあるよ。大人になったら、会社とかもそういうこともあるんだけど、Cちゃんはもうやって自分をアピール、どうやってその人たちがCちゃんのことを分かって入れてくれるかな」って、こうやって聞いてあげたりとか、話してあげたりとか。その人が嫌いとか、そういうのは問題じゃなくて。だから、そういうのは自分が母親だから、こういうものできるって。

(「いじめや虐待のニュース」とは?) そう、こういうのを見ると、こういうニュースを見る度に、いつもCちゃんに、子どもたちに、「外で何かあったら必ず家に帰って、パパ・ママみんなにしゃべって」ってね。「いろんな助け合う道があるよ」とか。そういうのはよくしゃべったりするね。とにかくこういう悩みは1人で抱えないで。

(「助け合う」とは?) 助け合うって、そう、兄弟とか、あと友達とか、自分の力じゃ1人で生きていられない。やっぱりこういう周りの人間とうまく関係つけて、兄弟とかもそうだし、助け合う、将来的に助け合って、そういう力がないと1人で絶対生きていられない。そういう意味での。自分の経験から言うとね、それがすごい力。

(「成長」とは?) 成長は、そうですね、いつも私がこうやって、「こういうほうがいいよ。こうしたらどう?」とか、本人はただ聞いて、うんうんって、本当は理解したかどうか分からない。で、たまに、すごくこういう成長を感じたとき、何て言うの、例えば、お母さんが疲れるから、「これこれこれ、私と弟と一緒にやってあげる、お母さん休んでいい」とか、何かそういう思いやりができたから、成長したなって思う。

(「やった!」とは?) 何かね、それ、何か、これとこれ「やった!」って、あ、関連がある、これとこれ「やった!」って関連がある。「やった!」って、本当は私の気持ちもあるし、子どもたち、何かうまくできたら「やった!」って言う、その気持ちもあるし、だから、この言葉を入れたんだけど、全部関連があるかな。うれしい気持ちで「やった!」とかね。そう。で、私も子どもたちの様子を見て、あ、うまくできたなって。それも「やった!」って。うん。

4.2.2 被験者Bに対する総合的解釈

11項目中10項目がクラスター1を構成しており、いずれも母親として子どもを心配する心情をよく表した項目である。子どもが病気や怪我をしないか、学校の帰りに事故に遭わないか絶えず気にかけている。苛められていることを家族に話せず自殺してしまう子どものニュースを聞くと、自分の子どもには勉強のことでも悩みでも、家の外であったことは包み隠さず何で

も自分に話してほしいと願わずにはいられない。Cちゃんが友だちから仲間はずれにあっていても心配だが、Cちゃんが自分に話してくれれば母親として、慰めてあげることが助言してあげることができ、支えてあげることができると思っている。家族で何でも話し合って気持ちを共有し、母親として子どもを支え、子どもの成長を共に喜び合えることが、母親としての務めであると認識している。そのためこのクラスターは〈母親として子どもに直接関わる自分〉であるといえよう。

それに対して、「授業参観」は、子どもが母親である自分の手を離れ、子ども一人の力で頑張っている姿を確認できる唯一の機会である。授業で先生の話をよく聞き、先生の質問に手を上げている様子は、普段子どもと一緒にいても見られないものであり、子どもが子どもの世界の中で自分の力で生きていることを確認できる貴重な経験である。自分が母親として子どもに直接関わるクラスター1とは異なり、「授業参観」では自分の手が届かないが、子どもが家の外（学校）でしっかりやっている様子を直に見られることは、子どもの口から話を聞くのと同じくらい、もしくはそれ以上に母親として安心できることなのかもしれない。よってこのクラスターは〈母親として子どもを間接的に見守る自分〉と解釈できよう。

全体として、Bには、母親としてできるだけ子どもと関わり、出来事や感情を共有して子どもを助け支えていきたいという思いが大半を占めている。その一方で、果たして子どもが母親である自分に本当に何でも話してくれているのか不安も感じており、授業参観は子どもの学校での様子を直に確認できる貴重な機会であると思っている。

5. 考察

2名の外国人妻に対し行ったWAIと、WAIで挙げられた「来日9年目の中国人」「2人の子どもをもつ母親」という回答についてPAC分析で得られた結果を通して、2名の外国人妻のアイデンティティについて考察する。

まず相違点は、被験者Aに見られた「中国人」というナショナルアイデンティティが被験者Bからは出てこなかった点である。異文化に生きる人々にとって、ナショナルアイデンティティや文化的アイデンティティは、顕在化しやすい意識であると思われたが、被験者BのWAIの回答のうち重要だと思われる上位項目に「中国」「中国人」という言葉は認められなかった。

この理由として、一つに結婚年数の違いと子どもの有無が考えられる。被験者Aは結婚2年目で子どもがおらず、家庭の中に関心が向くというよりも、日本の企業で働いている中でようやく日本社会において自己の力を周囲に認められ始めたことを感じているところである。Aは日本社会で周囲の日本人と違和感なく付き合えることに、自分の9年間の滞日経験の成果を見て取り、そんな自分自身を評価している。その反面、些細な言葉尻の違いを指摘されたり、仕事のミスで「外国人だから」というレッテルで判断されてしまった時、所謂自身の「ナショナル」な部分が外部によって強調された時に、「中国人」というアイデンティティが自身の内面からも湧き上がってくるものと思われる。一般的に、ナショナルアイデンティティや文化的アイデンティティは、異なる国の人と出会い、異文化接触した際に意識化されるものであることから、

被験者Aは日本社会という異文化の中に自分が置かれていることを滞日9年目の現在も未だに感じていることを意味する。そして、日本社会に自分を溶け込ませようと、一種の「同化」的な態度をとっている一方で、内面に潜む変わらぬ「中国人」の自分も同時に意識するのである。これに対し、被験者Bは、結婚10年目を迎え、二人の子育てに奔走する日々を過ごしている。夫も大事であるが、日中のほとんどの時間を共に過ごす子どもたちが彼女の生活の中心である。それになにより、仕事で毎晩帰宅の遅い夫に代わりほぼ全面的に子育ての一切を担っているため、「母親である自分がいなければ」という責任感が強く意識の上で働いている。日常のBの生活範囲は、家と近所での買い物、幼稚園や小学校、習い事の送り迎えが大半を占める。幼稚園や習い事で出会った保護者と話すこともあるが、会話の内容もやはり子どもに関するものである。とはいえ、子育てに関する悩みを相談したりストレスを吐露できるわけでもないため、慣れない日本での子育てに一人で問題を抱え込み、地域社会の中で孤立感を覚えていることがフォローアップ・インタビューで聞かれた。このようにBの場合は、専業主婦として家庭の中に納まり二人の子どもの母親として生きている時間が大半を占め、それ以外の場面で日本社会との接触が少ないため、ナショナルアイデンティティが現れてこなかったものと考えられる。

また、母親であることを強く認識しているにも関わらず、子どもに対し、何語で話しかけるのか、将来子どもに言語も含めてどのような力を身につけてもらいたいかなどといった教育的指針については、今回のPAC分析では解釈として挙がってこなかった。これについては、子どもたちに中国語も継承してもらいたいのか、将来どのような文化的な要素を備えた子どもに育ててほしいかといった教育的戦略が、B自身の中で明確ではないためと思われる。

ホール(1996)は、過去からの連続性により既に出来上がり固定化された本質主義的なアイデンティティに代わり、それが構築される過程に注目する構築主義的なアイデンティティを主張する。渋谷(2007:27)は、「ホールはかつていた場所＝ルーツ (roots) への帰還ではなく、ここへ至った道すじ (routes) と折り合っていく」大切さを説いていると述べているが、本質主義的なアイデンティティに代わり構築主義的なアイデンティティとは、単に固定的な過去を再生することではなく、ライフステージに応じた環境の変化と共に新たに語り直すことで自分自身を位置づけ直すものであるといえる。

今回の2つの事例について、被験者Aも被験者Bも、自己を支える確固たる主義や志向性をもってするというより、現在置かれている環境に慣れ、周囲から求められている役割を務めようと努力しているという共通点が見られた。したがって、今後環境や周囲の期待が変化することにより、彼女たちの自己に対する認識も移ろってゆくものと推察されるが、調査時点では、未だ中国出身であるという「ルーツ」や今日に至る「ルート」と折り合いをつけられていない部分もあると考えられる。

今回の調査では、WAIで挙げられた全ての項目について、PAC分析では2名の外国人妻のアイデンティティの深層構造を明らかにすることができなかった。重要度の上位項目には入らなかったが、被験者Aにはナショナルアイデンティティ以外の項目も見られたし、被験者Bにも「中国」「中国人」という言葉が見られた。「アイデンティティは決して単数ではなく、さまざままで、しばしば交差していて、対立する言説・実践・位置を横断して多様に構成される」(Hall

1996:12) ことから、今後は彼女たちのハイブリッドなアイデンティティを詳しく分析するとともに、環境の変化に伴って彼女たちのアイデンティティがどのように変化していくのか、その構築の過程を追跡していきたい。

参考文献

- 石河久美子 (2003) 『異文化間ソーシャルワーク』, 川島書店.
- 伊藤孝恵 (2006) 「外国人妻の夫婦間コミュニケーションの問題—先行研究の整理から—」『山梨大学留学生センター研究紀要』, 2:17-24.
- 大坊郁夫 (2005) 『社会的スキル向上を目指す対人コミュニケーション』ナカニシヤ出版.
- 河原俊昭 (2009) 「国際結婚の言語を考える」河原俊昭・岡戸浩子 (編著) 『国際結婚 多言語化する家族とアイデンティティ』第9章, 明石書店, 276-309.
- クルプラントン, ティラポン (2008) 「日本の都市部における国際結婚定住者の生活構造—日本に在住するタイ人女性を事例に—」『アジア遊学』, 117:114-121.
- 厚生労働省 (2006) 「平成18年度婚姻に関する統計」
<<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyu/konin06/konin06-3.html>>
- 厚生労働省 (2010) 「平成21年版 働く女性の実情」
<http://www.miraikan.go.jp/toukei/002/statistics/statistics_index.html>
- 賽漢卓娜 (2009) 「中国人女性結婚移民の『移動の物語り』」『21世紀東アジア社会学』, 2:90-105.
- 定松文 (2002) 「国際結婚にみる家族の問題—フィリピン女性と日本人男性の結婚・離婚をめぐる—」宮島喬・加納弘勝 (編) 『国際社会2 変容する日本社会と文化』第2章, 41-68.
- 猿橋順子 (2009) 「国際結婚外国人女性の支援を考える—言語管理とエンパワメントの視点から—」河原俊昭・岡戸浩子 (編著) 『国際結婚 多言語化する家族とアイデンティティ』第2章, 明石書店, 37-74.
- 渋谷真樹 (2007) 「海外で日本語を学ぶ日本の子どもたちのアイデンティティ—ある日本語学校の取り組みから—」『こころと文化』, 6(1):26-34.
- 鈴木一代 (2006) 「国際結婚者の適応と精神的健康—異文化出身の妻の場合—」『明治安田こころの健康財団研究助成論文集』, 42:86-85.
- 内藤哲雄 (2002) 『PAC分析実施法入門〔改訂版〕』ナカニシヤ出版.
- 原裕視 (1995) 「異文化接触とアイデンティティ」『異文化間教育』, 9:4-17.
- 平尾桂子 (2005) 「女性の学歴と再就職—結婚・出産退職時の労働市場再参入過程のハザード分析—」『家族社会学研究』, 17(1):34-43.
- 箕浦康子 (2002) 『日本における文化接触研究の集大成と理論化 平成12年度～13年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書』:13.
- 山田ゆかり (1997) 「職業的同一性の確立と自己概念」『名古屋文理短期大学紀要』, 22:29-35.
- Hall, Stuart (1996) Who Needs Identity?: Introduction, Hall, S. and Paul du Gray, eds. *Questions of Cultural Identity*. London: Sage Publications. (「誰がアイデンティティを必要とするのか?」宇波彰監訳『カルチュラル・アイデンティティの諸問題—誰がアイデンティティを必要とするのか?』第1章, 大村書店.)